

# チョーサーの「騎士の話」 におけるアイロニ

柴田竹夫

チョーサー (Geoffrey Chaucer, c. 1340—1400) の「騎士の話」 (*The Knight's Tale*)<sup>1</sup> の結末部におけるアルシータ (Arcite) の死の原因を検討してみると、神の下でのアイロニカルな人間像が見えてくる。そのアイロニは、特にトーナメント (馬上試合) におけるアルシータの勝利とそれに続く彼の死に端的に表われ、彼の死が、いと高き存在 (神と言ってもよいが) による「秩序」の観念と密接な関わりを持つことを明示する。そこで主にアルシータの現実に処する言動、想念、運命の分析を通して、こうしたアイロニと中世的「秩序」の観念を結び付けた観点からこの話を解釈してみたい。

さて「騎士の話」には二つの視座が設定されている。一つは死すべき運命を持った地上の人間のそれであり、今一つは天上の神々のそれである。神々は人間を操ったり、人間の心を洞察するが、人間は願を掛ける以外神々に対し、働き掛けることは出来ない。だが聴衆 (読者) は語り手の騎士の語りを通して両方の視座を与えられており、従って登場人物の運命を手取る如く、いわば神の如き万能の (omniscient) 目を持つ存在として、彼らの運命を知り得る立場に置かれている。

次にアルシータを巡るアイロニがどの様に聴衆に感じられるかを見てゆく。それはアルシータ自身の現実に処する言動、想念とその身に振り掛かる出来事との間のずれから生まれる。<sup>2</sup> このずれはアルシータのエメリー (Emelye) に対する言動、想念を巡って一貫して見られる。アルシータは自らの愛を自らの「死」と結び付けて様々に言葉で表現するわけであるが、それは飽くまでおのれの命を賭けてまでも貫き通そうとする愛の激しさを表わす為の強調、誇張表現であって、実際の死など夢にも想っていない。だが実際は彼の言葉

その儘になってしまう。例えば、アテネに行けば愛の苦しみが消えるという Mercury の神の神託をその儘に受けて、死をも恐れずにアテネに行こう、彼女の居る所で死ぬのも厭わないと考える。そして彼女に会いたいという彼の心の苦しみをまこと自らの死という代償を支払うことによって消し去る。トーナメントに勝利し、誇らしげに試合場を駆け巡るアルシータにエメリーも好意ある眼差しを投げ掛けるが、その幸福の絶頂も束の間、突然倒れた馬の鞍に胸を潰され、それが元で死んでしまう。

またエメリーの美貌に心打たれたアルシータが、「エメリーよ、おまえは眼でおれを殺す。おまえはおれの死の原因だ。」（“Ye sleen me with youre eyen, Emelye! / Ye been the cause wherfore that I dye.”）（I [A] 1567—8）と言う時、この「女性が男性を眼で殺す」という発想は、男性が然るべき女性の魅力に打たれた際の常套的なものであって、<sup>3</sup>勿論アルシータは文字通りになることを言っているわけでは決してない。

別の例として、トーナメントの勝利者にエメリーを妻として取らせると言うセーセウス公（Theseus）の宣言を聞いて、勝利即エメリーを得ることと一人合点し、軍神 Mars に勝利を祈願する。そしてそれが適えられる<sup>しほ</sup>徴を得るや喜び勇んで帰って行くが、その際勝利が死と直結するなどとは毫も想わない。

この様にアルシータは迂闊にも「物事は見える通りのものだと信じ込み」、勝利すること、死を口にすることが、まさしく死を招く結果になろうとは思ってもかけない。<sup>4</sup>この様なアルシータが、実際に死に行く様を目前にした時、聴衆は彼の言動、想念と実際の出来事との間の<sup>ずれ</sup>ずれを明白に知らされ、その時アイロニを強く感じるはずである。

ところでアルシータの死は不条理な死である。トーナメントで勝利し、騎士としての名誉の絶頂にあり、<sup>5</sup>しかも愛する女性の目前で余りに呆気ない非業の死を遂げる。このことは、一人アルシータのみならず、彼の葬儀において涙す人々にとっても痛恨の極みである。

古来闘争は、「神明裁判」と結び付けて考えられてきた。ホイジンガも、

次の様に「神々の意志」の表われとして闘争を捉える。「闘争というものも、予言や裁定者の前でする審理と変わりなく、法律手続の一つの形式である。結局、すべての物事に決定を下すということには神聖な意味が賦与されるのだから、我々の闘争をもそれなりに予言として捉えることが出来るわけである。」<sup>6</sup> と。ではこの観点からすれば、実力によってトーナメントで勝利を収めたアルシータは、神々によって義とされたはずである。然るにこの彼が、何故かくも悲しい死を遂げなければならなかったのかという素朴な疑問が当然湧いて来る。

もともと不条理とアイロニは密接な関係を持つ。Northrop Fryeは、次の様に聴衆の優越的な目を指摘する。「もし力や知性の点で我々自身より劣っていて、その為我々に、束縛、挫折、不条理の場面を見下ろしている様な感じを与える主人公がいるならば、そういう主人公はアイロニの様態モードに属している。」<sup>7</sup> と述べている。

万能の神の如き視座を与えられた聴衆にとって、アルシータも又Fryeのいう「アイロニの様態モードに属している」と言える。かくして聴衆は世俗の様々な棚しがみ つなに塞ぎとめられた登場人物の様々な束縛、挫折、特に不条理な死を見下ろし、Fryeのいう「優越」(superiority), 「解放」(freedom), 「慰み」(amusement)<sup>8</sup> を感じるはずである。

一方その優越的な目を与えられた聴衆は、エメリーに対する愛故のアルシータとパラモン(Palamon)の様々な行動を通して、死すべき運命にある人間の愛の儂はかさのみならず、人間の愚かさをも思い知らされるわけである。次にそれを具体的に見ていく。

ある時アルシータは自らを酔いどれのイメージに託して、目先のことしか考えず、それでいて幸福を追い求めるが、中々手に入れられない人間の束縛された姿に対し、次の様な激しい苛いら立ちを表白している。「おれたちはこの世で何を求めたらいいのか分っていない。酔いどれは自分の家があることをよく知っているが、どの道が家に向う正しい道なのか分らない。熱心に幸福を求めるんだがよく道に迷ってしまう。牢獄を出たら、喜びと完全な幸福の

中にいるんだという大いなる信念を抱いていたのだが今や幸福に見放されてしまった。」（“We witen nat what thing we preyen heere: …/A dronke man woot wel he hath an hous, /But he noot which the righte wey is thider, …/ We seken faste after felicitee,/But we goon wrongful often trewely. …/ That wende and hadde a greet opinioun/ That if I myghte escapen from prisoun, /Thanne hadde I been in joye and perfit heele, / Ther now I am exiled from my wele.”）（I[A]1260—72）この様にアルシータは人間が束縛された存在であることを十分承知している。にも関わらず、セーセウスによってアテネから追放された後、再びエメリーに会いたい一心でアテネに舞い戻るといふ、出獄したことに続いて、再び道を踏み外す結果となり、自ら死を招いてしまう。

優越的な目を与えられた聴衆が、「この世とは何だ。人は何を求めているのか。愛する人と一緒になったかと思うと、すぐに冷たい墓の中に入らなければならない。一人ぼっちで連れそう者も無く。」（“What is this world? what asketh men to have? / Now with his love, now in his colde grave / Allone, withouten any compaignye.”）（I[A]2777—9）という呻吟の声を発して死にゆくアルシータのアイロニカルな姿を見る時、人間の愛の儚さと同時にその愚かさに心打たれることであろう。

更には、アルシータとパラモンは、彼らの間の友情を犠牲にしてまでも愚かに相争ったわけである。男性間の友情は、『ロランの歌』のロランと戦友オリヴィエとの間に見られる如く、封建騎士にとって最も深い世俗的感情<sup>9</sup>ときずなであったはずである。それにも関わらず、この二人はエメリーへの愛故に激しい恋の争いを始める。まずパラモンはアルシータに向ってこう叫ぶ。「おれの方が先に彼女を愛した。それにおれを助けるべき親友であり、誓いあった兄弟としておれの悲しみを打ち明けた。だからおまえは騎士としておれを助けるべきだ。」（“I loved hire first , and tolde thee my wo / As to my conseil and my brother sworn / To forthre me, …/ For which thou art ybounden as a knyght / To helpen me…”）（I[A]1146-50）

と。これに対してアルシータは、次の様に言葉巧みに反駁する。「おまえは彼女を女性か女神か分らないと言ったではないか。おまえのは神様に対する愛だが、おれのは人間に対する愛だ。だからおれの身に起きた事を身内に対する様に、又誓いあった兄弟に対する様に言ったのだ。仮におまえの方が先に彼女に惚れたとしても、愛はいかなる人間に与えられる掟よりも偉大な掟だ。」(“What writow seyen? Thou woost nat yet now / Wheither she be a womman or goddesse ! / Thyn is affeccioune of hoolynesse, / And myn is love, as to a creature; / For which I tolde thee myn aventure / As to my cosyn and my brother sworn. / I pose that thow lovedest hire biforn; … / Love is a gretter lewe, by my pan, / Than may be yeve to any erthely man;”) (I[A]1156—66) と。ここに見られるのは「愛と友情の葛藤」<sup>10</sup>である。

チャーサーはこの様にしてアルシータを巡るアイロニを通して人間の愛の儂さ、人間の愚かさを語るが、「愛と友情の葛藤」というこの不調和の一方で、この話からは「人生は絶えざる闘争、論争、不調和の連続ではあるが、実は神がそれを根底で支えている。」という秩序観が看取出来る。

C. Muscatine もこの話における構成面の *symmetry, balance, order* の強調を指摘しているが,<sup>11</sup> 本稿では特に内容面からこの秩序観の表われを見ていくことにする。

それは三つの事柄から伺える。一つは、パラモン、アルシータ、エメリーら三人三様の神々への祈りにおいて、二つは、アルシータが死に際し‘gentillesse’を示したと言えることにおいて、三つは、セーセウスその人が「神の代理人」として描かれていることにおいて見られる。これらを順を追って見ていく。

まず三人三様の祈りにおいて、パラモンは女神 Venus にただエメリーを我物にしたいと祈り、エメリーは女神 Diana に二人の貴公子の情熱が消え去るか、あるいは最も彼女を欲する者との結婚を祈り、アルシータは軍神 Mars に勝利を祈る。その結果、パラモンはエメリーとの結婚により彼女を我物に出来、エメリーは真に彼女を愛する男と結婚出来、アルシータは勝利を得る。

この様に祈りに照らしてみると、三人三様の祈りは、完全に適えられているわけである<sup>12</sup>

次にアルシータの ‘gentillesse’ について。彼は死の間際にエメリーに次の様に言う。「パラモンほど愛されるに適わしい者を私はこの世で知らない。もしあなたがいつか人の妻になられるのならば、パラモンのことを忘れないで下さい。あの立派な男を。」(“As in this world right now ne knowe I non / So worthy to ben loved as Palamon…/And if that evere ye shul ben a wyf / Forget nat Palamon, the gentil man,”) (I[A]2793—7) と訴えて、今まで互いに<sup>いが</sup>睚み合ってきたにも関わらず、パラモンを賞め讃え、再び友情を取り戻す。つまりアルシータは ‘gentillesse’<sup>13</sup> を示したと言える。パラモンも又アルシータの死後 ‘gentil’ となったと語り手及びセーセウスも述べている。かくして一旦は外れた「愛の美しき連鎖」(‘the faire cheyne of love’)<sup>14</sup> (I[A]3038) つまり一つの秩序が回復したわけである。

最後にセーセウス公がこの世の秩序を司どる ‘the Firste Moevere’, 「神の代理人」として描かれていること<sup>15</sup>は次の様なことから言える。セーセウスは人の道に背いた行為<sup>16</sup>をしているクレオンを成敗する。又パラモンとアルシータが森の中で審判者も無く決闘しているのをみつけるやいなや、それを強く制止し、トーナメントで決着をつける様命じる。その為に壮大な試合場を建設し、当日自ら審判者として神の如き振舞いをする。彼は自ら Venus, Mars, Diana の三神に仕え、あるいは仕えたことがあると語ることや、アルシータとパラモンの愛の闘いを見て、「何事が起ころうとも、愛に仕える自分達は全く利口だと思っている。」(“And yet they wenen for to been ful wyse / That serven love, for aught that may bifalle.”) (I[A]1804—5) と皮肉ることから、愛に仕える者の愚かさを十分知っていると言える。彼はアルシータに適わしい立派な葬儀を執り行なう。なによりもパラモンとエメリーを前にしての「天にまします主動者が最初に愛の美しき連鎖をお造りになった時、その結果は偉大で、その目指す所は高い、云々」(“The Firste Moevere of the cause above, / Whan he first made the faire cheyne of love,

／Greet was th'effect, and heigh was his entente.”）（I[A]2987—9）で始まるアルシータ追悼の辞において、神によるこの世の秩序を説いていることに注目しなければならない<sup>17</sup>。

今、「神によるこの世の秩序」と言ったが、チャーサーは、この話において、「神」と「神々」とをしばしば言葉の上でも一見曖昧に使う。だが彼が異教の「神々」の背後にキリスト教の「神」を考えていることは明らかである。そこでこの話における両者の関係を見ておきたい。

「騎士の話」における「神々」は、人間の心のメタファー<sup>18</sup>として働いているし、又運命の女神、星々と共に神の摂理のこの世における働きを目に見える形で表わす為のアレゴリカルな文学的表現としても捉えることが出来る。女神 Venus は人間の生における抗い難い情熱<sup>あか</sup>を表わしており、エメリーを我物にしたいというパラモンの心そのものと言える<sup>19</sup>。

「運命の女神」(Fortune)<sup>20</sup>は人間に決定的な影響力を行使する超人間的、天的存在として捉えられている。クレオン成敗後、アテネに凱施途上のセーセウスに対し、かつては公爵夫人か女王であった黒衣の女達が次の様に痛切に訴え掛ける。「いかなる身分の者にも安定を保証しない運命の女神とその不実な車輪のせいで」（“Thanked be Fortune and hire false wheel, / That noon estaat assureth to be weel.”）（I[A]925—6）今は哀れな物乞いの身に落ちてしまったと。あるいは牢より釈放された時、アルシータは、「運命はさいころを振った。」（“Wel hath Fortune yturned thee the dys…”）（I[A]1238）と運命の転変を嘆く。語り手も、アルシータが運命のわなにはまるまで、苦しみの源になるものが身に迫っていようとは思ひもしなかったと語る（I[A]1489—90）。セーセウスもトーナメントを宣言する時、「運命がかくも好意ある恵みを与えた者にエメリーを妻として取らせる。」（“Thanne shal I yeve Emelya to wyve / To whom that Fortune yeveth so fair a grace.”）（I[A]1860—1）と言う。

ところでこの「運命」と「神の摂理」との間関係については、語り手の「神があらかじめ定め給うた摂理をあまねくこの世で実行する運命は神の名

代であって、この世における我らの欲望は、それが戦争であれ、平和であれ、憎しみであれ、愛であれ、すべてそれらは摂理によって支配されている。」<sup>21</sup>  
（“ The destinee, ministre general, / That executeth in the world over al / The purveiaunce that God hath seyn biforn, / So strong it is that … / For certainly , oure appetites heer , / Be it of werre, or pees, or hate, or love, / Al is this reuled by the sighte above.” ）（I[A]1663—72）という発言から運命とは神の名代であり、人間の心も又摂理の下にあると考えられていることがわかる。

天上の星々も地上の人間の存在を規定する力を持つ、運命と結び付いた存在として捉えられている<sup>22</sup>。例えば、獄中でアルシータはパラモンに向って次の様に嘆く。「運命がおれたちにこの不運を与えた。星々の位置関係による Saturn の悪い相もしくは配置が、おれたちにこの不運をもたらした。」

（“ Fortune hath yeven us this adversitee. / Som wikke aspect or disposi-  
cioun / Of Saturne, by som constellacioun, / Hath yeven us this…” ）  
（I[A]1086—9）と。

この様に見てくると、いわゆる「神々」も又超人間的存在、天上的存在として、地上の人間に対し決定的な力を及ぼしうることは明らかである。例えば、パラモンの嘆きの中にもそういう考え方は反映している。彼は、Saturn の神の、そして嫉妬深くて気狂いじみた女神 Juno のせいで牢に入っており、Juno はテーベの人命をほとんど殺害してしまった。一方で女神 Venus が彼の心にアルシータへの嫉妬心と怖れを起こさせて、彼を殺そうとしていると言う。アルシータも、Mercury の神の神託通りにアテネ行きを決意するその際、Mars や Juno を残忍な抗い難い存在として捉え、「あなた方の怒りがわが同胞をことごとく亡ぼしてしまった。」（“ Allas, thou felle Mars! allas, Juno! / Thus hath youre ire oure lynage al fordo …” ）（I[A] 1559—60）と嘆き悲しむ。あるいは女神 Diana はエメリーに対し、天上の神々の間では二人の内の一人与結婚することは定められたことと神々の約定<sup>やくじゆう</sup>の優先を伝える（I[A]2349—51）。何よりもパラモンらの神々への祈りと、そ



れがもたらす天上での愛の女神 Venus と軍神 Mars との間の確執とそれに続く Saturn の神による解決という「騎士の話」における主要トピックひとつをとってみても、超人間的存在として「神々」が人間に決定的な力を及ぼしていることが察知される。

セーセウスはアルシータ追悼の辞において、‘Jupiter’ と ‘God’ の名を並べて呼んでおり (I[A]3035, 3064, 3069, 3099, 3108), 更に “The First Mover of the cause above” (I[A]2987) と呼ぶ。中世の哲学では神は宇宙の主動者 (First Mover) であり, 第一原因 (First Cause) とも考えられていた。<sup>23</sup> つまり主神 Jupiter は神を示唆すると推察される。

以上のことから, 結局「騎士の話」における「神々」は, 運命の女神や星々と共に, 神の摂理の地上における働きを表わす為のアレゴリカルな表現<sup>24</sup> であって, チョーサーは人間の思惑を超えた超人間的, 天上的存在の視座という様なところを押さえていると言える。

それでは「神の摂理」と結び付いた異教の神々という視点から今一度アルシータの死を振り返ってみると, 次の様な事が理解される。彼の死の直接の原因というのは, アルシータの跨がる馬が怪物に驚いたことによる (I [A] 2684)。トーナメントでパラモンが敗れた為に涙を流す女神 Venus を Saturn の神が鎮めようとして, Pluto の神に助力を求める。そこで Pluto は怪物を地上に遣わしたわけである。登場人物達にとって不条理と見えるアルシータの死も, 万能の視座を与えられた聴衆にとっては, かくの如く神々の条理に基づくものであることが理解されよう, たとえ登場人物達には不条理と見えても, 彼らの認識を越えた所で神々の条理は働いているわけである。

結局, 「騎士の話」における神々と人間の二つの視座の設定の持つ意味を考えると, 人間の視座に依存する不条理の認識と, 他方その不条理が神の摂理に基づくものであって, 従って人間は神の掌<sup>たなこころ</sup> 中にあるという認識を聴衆に明白に与える働きをしていると言える。そしてこのことからこの話のアイロニが, 天上的視座からみた地上の人間の存在に固有のものであること, 及びアルシータを巡るアイロニがいと高き存在による「秩序」の観念と深く

関わっていることが明らかになったことと思う。

アイロニによる聴衆に対する人間の愛の儂<sup>はか</sup>さ、無知蒙昧さ、愚かさの悲痛だけれども痛烈なる暴露を通して、その一方でパラモン、アルシータ、エメリーの三人三様の慰め、パラモンとアルシータの友情の回復、セーセウスによるパラモン、エメリー達に対する慰め、最後にパラモンとエメリーの結婚というアルシータの死後の、「秩序」と結び付いた一連の出来事を通して、語り手の騎士は、聴衆に対する慰めを与えている。カンタベリへの巡礼者の一人教区司祭 (Parson) も説く様に、結婚とは男女の合法的結合であり、秘蹟であり、その目的は私通を浄化し、教会を善良なる子孫で満たすことである。Boethius は *Consolation* (Ⅲ, M2) において、「始めと終わりを結んでみずから堅実な道をたどらなければ何物も秩序には属さない。」と言うが、「騎士の話」においても冒頭のセーセウスとイポリタ (Ypolita) の結婚にみる如く、聖なる結婚で語り始められ、パラモンとエメリーのそれで語り終えられる。「かくてパラモンとエメリーの話は終わった。神よ、かかる総ての美しき輩<sup>ともがら</sup>を助けたまえ、アーメン。」(“Thus endeth Palamon and Emelye; / And God save al this faire compaignye ! Amen.”) (I[A]3107—8) という神の名の下に語り手の騎士がその語りを終えた時、聴衆は安堵の胸を撫で下ろすと共に、ともかくも不調和から調和へ、混沌から秩序の世界へと運ばれたわけである。

(本稿は第33回中世英文学研究会例会〔1981年5月3日〕、於 関西外国語大学での口頭発表をもとにしたものである。)

## 注

- 1 *The Knight's Tale*の引用は、総てF. N. Robinson (ed.), *The Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. (London: Oxford University Press, 1957) に依る。括弧内の数字は行数を表わす。
- 2 Germaine Dempster, *Dramatic Irony in Chaucer* (New York: The Humanities Press, 1959), p. 7.
- 3 The conceit of the arrow of loveは、Andreas Capellanus (fl. 1180s), Ovid (43 BC–AD18), *Roman de la Rose* (c. 1230, c. 1275) にも見られる一つのconventionとしてあった。(M. Valency, *In Praise of Love: An Introduction to the Love Poetry of the Renaissance* [New York: Octagon, 1958], p. 150)
- 4 アイロニの犠牲者について、Mueckeは次の様に言う: “[the victim of irony] need only reveal by word or action that he does not even remotely suspect that things may not be what he ingenuously supposes them to be. The basic is a serene, confident unawareness coloured, in practice, by varying degrees of arrogance, conceitedness, complacency, naivety, or innocence.” (D. C. Muecke, *Irony* [“The Critical Idiom 13”: London: Methuen, 1978], pp. 28–9)
- 5 セーセウスもアルシータへの追悼の辞において、人々にこう説く: “Thanne is it best, as for a worthy fame, / To dyen whan that he is best of name.” (I [A] 3055–6)
- 6 ホイジンガ、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』(東京: 中央公論社 [中公文庫], 昭和51年) 194–5頁。 “Thanne shal I yeve Emelya to wyve / To whom that Fortune yeveth so fair a grace.” (I [A] 1860–1) というトーナメントを宣言する時のセーセウスの言葉も「神明裁判」を念頭に置いたものと考えerことは無理なことではない。cf. 世良晃志郎「中世法の理念と現実」(『岩波講座世界歴史7』), (東京: 岩波書店, 1969), 429–30頁。
- 7 Northrop Frye, *Anatomy of Criticism: Four Essays* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1973), p. 34.
- 8 cf. アイロニの観察者についてMueckeはこう言う: “What an ironic observer typically feels in the presence of an ironic situation may be summed up in three words: superiority, freedom, amusement. Goethe says that irony raises a man ‘above happiness or unhappiness, good or evil, death or life’.” (D. C. Muecke, *op. cit.*, pp. 36–7)
- 9 C. S. Lewisは、この二人の間の友情についてこう言う: “The deepest of worldly emotions in this period is the love of man for man, the mutual love of warriors who die together fighting against odds, and the affection between vassal and lord.” (C. S. Lewis, *The Allegory of Love: A Study in Medieval Tradition* [New York: Oxford University Press, 1976], p. 9)

- Andreas Capellanusも真の友人ほど貴重なものはこの世にはないと明言する: “If out of all mankind one finds a single friend, he has found something more precious than any treasure, since there is nothing in the world so valuable that it cannot be compared to a real friend. . . a true friend becomes even more faithful in his friend’s adversities and more constant in every misfortune.” (New York: Frederick Ungar, 1959), p. 189)
- 10 cf. A. C. Spearing (ed.), *The Knight’s Tale* (Cambridge: Cambridge University Press, 1978), pp. 16–18.
- 11 C. Muscatine, *Chaucer and the French Tradition: A Study in Style and Meaning* (Berkeley: University of California Press, 1957), pp. 175ff. cf. J. P. McCall, *Chaucer among the Gods: The Poetics of Classical Myth* (University Park: The Pennsylvania State University Press, 1979), p. 83.
- 12 神々への祈りの順序は、「騎士の話」とその粉本であるBoccaccioの *Il Teseida* とでは異なる。「騎士の話」では、(1)パラモンからVenusへ、(2)エメリーからDianaへ、(3)アルシータからMarsへとなり、*Il Teseida*では(1)ArcitesからMarsへ、(2)PalaemonからVenusへ、(3)EmeliaからDianaへとになっている。「騎士の話」では、祈りの順序は、中世の天文学(占星術)による祈りの時間(三人の祈りの時間への言及は、チョーサーによる付加)に合わせている。更に細かな事を言えば、*Il Teseida*では、Dianaの宮は設けられていないし(VII, 79ff)、ArcitesはMarsの他にApollo神へも祈りを捧げている(IV, 42)。( *Il Teseida*のテキストとしてはGeovanni Boccaccio, *The Book of Theseus*, trans. B. M. McCoy [New York: Medieval Text Association, 1974] を使用した。) なお中世の天文学については、J. L. Lowes, *Geoffrey Chaucer and the Development of His Genius* (New York: Houghton Mifflin, 1934)の第一章、W. C. Curry, *Chaucer and the Medieval Sciences* (New York: Barnes and Nobles, 1960)、及び毛利可信、「チョーサーと天文占星術(1)」『英語青年』1974年9月号(vol. cxx, No. 6)、5～6頁を参照。
- 13 “your capacity to show ‘gentillesse’ depends on your capacity for friendship or love…” (Nevill Coghill, *Chaucer’s Idea of What Is Noble* [“Presidential Address”: London: The English Association, 1971], p. 12) cf. 14, 15世紀において, “it was thought that each person’s entire life flashed before his eyes at the moment of death. It was also believed that his attitude at that moment would give his biography its final meaning, its conclusion.” (Philippe Ariès, *Western Attitude toward Death from the Middle Ages to the Present*, trans. Patricia M. Ranum [Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1978], pp. 36–8)
- 14 cf. Boethius’ *Consolation of Philosophy*, B2. V8.
- 15 cf. W. Ullmann, *The Individual and Society in the Middle Ages* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1966), p.26.

- 16 テーベの王Creonが敗軍の将達の亡骸に‘vileyne’を与える為に無残にも犬に食わせていること。Boccaccioの注によると, “In olden times it was customary to burn the bodies of the dead and to bury the ashes to which they were reduced.” (*Il Teseida*, p. 74, note to St. 13) See also note to St. 31. 然るべき埋葬がなされないことはキリスト教の立場からも非難されるべきものである (『第二法の書』28:26, 『列王の書上』13:22, 29~30; 14:11; 16:4; 21:23~24, 『列王の書下』9:10, 35~37)。
- 17 セーセウスについて詳しくは, 拙稿『「騎士の物語」における君主像』(『主流』同志社大学英文学会, 第44号, 1983年), 1~22頁。
- 18 cf. J. P. McCall, *op. cit.*, p.171, n. 20. P. Ruggiers, *The Art of Canterbury Tales* (Madison: The University of Washington Press, 1965), p. 156. R. Neuse, “The Knight: The First Mover in Chaucer’s Human Comedy,” *UTQ*, 31 (1962), 299—315.
- 19 cf. P. Ruggiers, *op. cit.*, p. 156.
- 20 H. R. Patch, *The Goddess Fortuna in Medieval Literature*(New York: Octagon Books, 1967) を参照。
- 21 この考えはBoethius に基づく (*Consolation of Philosophy*, IV, P6)。中世においてキリスト教の聖人と考えられていた彼とチャーサーとの関係については, B. L. Jefferson, *Chaucer and the Consolation of Philosophy of Boethius* (New York: Gordian Press, 1968) を参照。
- 22 W. C. Curryに依れば, 「騎士の話」のEmetriusとLycurgusの二人の王は, SaturnとMars という二つの占星術的勢力を各々表わす人格であり, この二人に対して, チャーサーはこの二つの星の影響の下で生まれた人間特有のものとされる肉体的特徴をほとんどそのままに描写している。(W. C. Curry, *op. cit.*, pp. 130—7)
- 23 A. C. Spearing, *op. cit.*, p. 189, note to l. 2129.
- 24 cf. マッキーン, 安西徹雄訳『アレゴリー』(文芸批評ゼミナール14) (東京: 研究社, 昭和46年), 62頁; W. C. Curry, *op. cit.*, p. 149; J. P. McCall, *op. cit.*, p. 13; Jean Seznec, *The Survival of the Pagan Gods: The Mythological Tradition and Its Place in Renaissance Humanism and Art* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1972).